

野口武彦著<今昔物語>またまた今昔物語を読んでいる。この本は、時代背景、人間関係、社会背景、今昔物語が書かれた当時の世相を、その中身を解説しつつ、本は進行していく、これは面白い。と言いながらも前回、「そのものがわからねば 解説に頼っては はいけませんなあ」「中身だけを味わう その力を つけなくては」と言ったすぐから。ちょっと待て、「言ったすぐから」という語句、と考え「舌の根が乾かぬうち」を思い出した。なんだか何度か聞いた言葉だけれどと思いながら、「なぜ舌の根」なのか、「舌」「舌の先」ならいけないのか、「だれが言い出した」「いつの時代」と調べたが載っていないのでこの話は、分からぬままに、けったいな語句ながら、面白い語句、で終わり。

下女が、朝早く起きて、三、四頭の犬が死んだ子供を食っているのを見たというのである。現場には子供の頭と胸の一部が残っているが、手足はなかったそうだ。同じ厨（くりや：調理場）の雑人の話では、碑女（はしため）が病気に罹ったので追い出され死んだ。女の十歳ばかりの女の子どもが、毎日、厨のまわりをうろついて物乞いしていた。日を追って憔悴し、屋敷に入り込んで絶命し、犬に食われたらしい。平安京は貧富の格差が見える古代都市だった。悪臭プンプンたる貧困地域、そこで暮らす下層庶民の児童は、親に保護されるどころか、日常的に遺棄と餓死の脅威にさらされていた。

卷二十九第二十九話：「女、乞匄（こつがい）に捕らえられて子を棄てて逃ぐる語（こと）」話の運びは単純明快。子をおぶった女が街道を歩いていた。二人の男が後ろから追ってきて、人氣がなくなり女をレイプしようとする。女は観念して「ちょっと 用を足したい」という。「だめだ 逃げるだろう」「なら 質に 子供を置いていく」女は一目散に逃げた。腹を立てた男は、子供を殺した。この女は子供をほっぽらかして自分だけ逃げてしまう。子はかわいそうだが、男に身を任すことはいやだ、まわりの者たちは、子を棄てても逃げたことを讃嘆している。身分の低い女でも恥を知る人がいるのだ、と讃嘆している。もう一つ乞匄の事。平安時代にはまだ非人身分はいまだけいせいされていない。乞食・乞匄の用例は①托鉢僧 ②諸国を浮浪人③清水坂下に群がる貧困民集団。

卷十九第四十四話\*「達智門（たっちもんの捨て子に狗（いぬ） 密かに来て乳を飲ましむる話」ある朝この門に来かかった男が、生後十日余りの男の子が棄ててあるのを見つけた。かわいそうに思うが通り過ぎた。翌朝同じ場所を通りかかると、その子は元気そうにまだ生きていた。その次の朝も生きていた。男は不思議に思い、その夜達智門に忍んで行った。男の目の前では奇怪な光景が繰り広げられた。群がる野犬がその子供によりつかないのである。夜が更け巨大な白い犬が出現し、他の犬は恐れて逃げ去ってしまう。ああ、この子はこの白い犬に食われてしまうのか、と見てみると、なんと、大犬は子供に添い臥して自分の乳を吸わせるではないか。そのあと、何日かたって、子も犬も消えてしまった。

この辺りを読んで、ヒトそれぞれが持っているマインドの違いだと思った。ヒトは時代・地域によって、生き方死に方、対人・対物への処し方、世間一般の常識、それらが違っている、ちょっと違っていることもあれば、「へえ～」と驚くほどに全く違っていることもある、というより違っているのが当たり前だ。みなさんの考え方、処し方が同じであるという方がおかしい、それは何らかの力が加わっているからそうなるので、俗にいう支配されている状態なのだ。当時は「子供が死んでいる そんなもの ほっておけ」「したいなぞが 屋敷にあると 穢れる」「子供の幸せより 自分の衣食住が 大事だ」これが当たり前だという社会だったのだ。平安時代、格差社会だとか、治安が悪いとか、不潔極まりないだとか、もちろんこれらはあつたらう、というより、今の日本が反対に極端すぎるぐらい、いい。ヒトの死に対して、千年前のヒト、万年前のヒトが、仲間や親・子供の死に対して悲しみ悼み、祭つたらうが、今の我々と気持ちの持っていくようが全く違って当たり前だと思う。むしろ今の状態は、気持ちに先行して儀式・決まりに振り回され、「悲しい などと言って おられない 泣いている 暇がない」ということになっている。死に対してこの儀式ばった様式ばかりを追ってはいけませんぞ。

松原始著<カラスの教科書>V君から、面白い本を読んでいると紹介され、図書館の動物コーナーを探してみると、カラス関係の本を3冊見つけた。紹介されたものが、どれだったか忘れてしまっていたが、“動物行動学”と聞いていた。これ以外に、宮崎学著<カラスのお宅拝見>なんとこれはカラスの巣の写真集、日本全国のカラスの巣、巣の中の卵やヒナが写っている。昔のフィルム写真の時代に、木のとっぺんに登り両手を使って、絞りだ、シャッター速度だ、次のレンズだと、なかなか現れない鳥の写真を撮るやつは忍者か仙人かと思っていた。先生、今でも木に登って鳥を撮るといふ、あの細い枝に、あの高いてっぺんに、と驚く運動神経、オレと歳がそうは変わらないのね。なんと、カラスの卵は、緑色である。もう一つは、佐々木洋著<カラスの思惑>東京都鳥獣保護員からナチョラリストになった人。

日本にいる、カラスは“ハシブト”“ハシボソ”カラスがいるという、ほかにも幾種類かいるそうだが、まわりに常にいるヤツは、この二種類だそう。その話を聞き、オレは今日も安威川河川敷にやってきた。河川敷のような場所にいるヤツはだいたい“ボソ”だそうで、家のまわり、市街地の電柱や電線を勢いよく横切るのは“ブト”だという。河川敷で、ちょっと観察してみようと、じっと見つめると、何が恥ずかしいのやら、スッと飛んで行ってしまふ。いつもは近づいても逃げず、飛ぼうか飛ぶまいかと、うずうずしているさまが見て取れるのだが。オレが「おい どっちだ ぶとか ぼそか」と見ていると、いやな奴だなと言わんばかりに飛び去ってしまう。それに今日は日曜日なのか数が少ない。ここに来る奴は、横の中央市場の残飯が目当ての連中、ひょっとして今日は中央市場が休みなのかも知れない。「おい どっち なんだ」と問へど、いらえはない。先生の話では、ボソの方が少し小さい、くちばしが細い、と簡単にいうが、なかなかわかりにくく、これがわかれば一人前、とおっしゃるように、小さいような、大きいような、くちばしも、尖ったような、丸いような、これは難物である。中には細いもの、大きいもの、くちばしが丸いもの、と見て取れる、「ええい どうでもいいや」で終わりにする。

“ハシブト”は、森林、山、高層ビル、都市部ではほとんどが彼ららしい。“ハシボソ”は農耕地、河川敷、広々見通しのいいところを好む、見えるということで、大声は出さないという。我が家のまわり、住宅地の電信柱や屋根で、大騒ぎする連中が“ハシブト”ということらしい。彼らは決して交りはしないという、雑種はないそうで、うまく棲み分けているらしい。カラスは雑食性で、スカベンジャー（掃除や）だという。自然の中では、動物の死骸をつつき中の肉を食う、同じように、ごみのビニール袋をつつき中の旨いものを食う、何ら不思議はない、おなじだと先生はいう。これは、スズメが木の洞の代わりに、換気口やパイプを巣に。セキレイが干上がった川床の代わりに道路を。ドバトが岩山の代わりに建造物を。ハヤブサが断崖の代わりに、高層ビルを、ということと同じらしい。これはちょっと「違うこともあるのでは」と口を挟みたくなるが・・・京都で勉強した動物行動学の先生の本を二三冊読んだが、どうもオレの奥底にある琴線に触れない、すごい、面白いと心底思えない、「こんなことなら オレでも 知っているぞ」「ここをもっと 聞きたいのだが 知らないよ 逃げてしまふ」というような不満がある、売れるように書いているのかな。

◎カラスの黒はきれいだねえ。カラスの濡羽色とは、青、緑、紫等を感じさせる黒だそう。オレも絵の具で黒を表すときには、青、緑、紫等をそっと上塗りすると、ますますくろい黒ができますぞ。

◎夏の熱い日中には、彼ら、口を半開きをしている。「ハ〜ハ〜 くそ〜 暑い」とはいついもないが、そう見える。

◎カラスは、フクローが嫌いそう。オレは残念ながら自然の中でフクローを見たことがない。この二種が犬猿の仲だとは知らなかった。夜に、カラスはフクローに捕食されるらしい。天敵のひとつだそう。なので、昼間にフクローを見つけると、仲間が寄ってたかって、攻撃するそう。

◎ユリカモメは海の鳥だというが、安威川にもいる。ここは海から20キロも内陸部だ。ただ、彼らがいる安威川は、オレがいつも行く人のいない所ではなく、ヒトが多い少し上流部だ。というのは、ヒトが餌をくれるかららしい。空中にとんだパン屑などをサッと食うさまは素晴らしいとヒトが愛で、餌をくれるらしいが、その分、カラスの肩身が狭くなってしまうらしい。

前回のカラスのつづき、気になるヤツがいるのだ。昔は、ここら辺りに、鶺はいなかった、ここら辺りの川や池でその姿を見たことはなかった。鶺が目につきだして、まだ10年20年ぐらいだろうか。もちろん鶺という鳥の事は知っていた、少し離れるが、10キロぐらい西北西にある昆陽池が彼らの集会所というか、ねぐらだと昔から知っていた。昆陽池に行けばたくさんの鶺が見られた。オレが安威川に通いだして20年ぐらいになるのか、「え 鶺がいるじゃない」と驚いて彼らを見ていた。それ以来、安威川に行けば必ず目につく。川の中で浮かんでいるか、中洲の砂や石の上で休んでいるか、川沿いに飛んでいる。土の上や石の上で、羽を広げて水に濡れた羽を乾かしている。黒いということでカラスと同じ色だが、同じ鳥ながら体形は違うねえ。

鶺は人嫌いなのか、20メートルまで近づくと、ぱたぱた飛び去ってしまう。魚を捕まえるのが上手いと聞いているが、きゃつめ水に潜っての捕食なので、どのような格好で、どのようなスタイルで、どのような技術で、魚を追いつめるのか全く想像もできない。いろんな動物番組、水中の鳥が進む姿、泳ぐ姿は放送されているが、鶺を取り上げた動画はなかった。きゃつめのねぐらがどこかは知らないが、空高く複数の群れで飛んでいく様はほかの鳥の如く、止まってすまして立っている姿は、いささか上品に見える。そういえば鳴き声は聞かないねえ、同じように上品な鷺君の、あの下品な声には辟易するが、鶺が泣いている声は聞いたことがない。川の中州あたりに、カラスやカモやサギ等と羽を休めている。連中は仲がいいのか悪いのか、干渉しあうことも争うこともなくただぼおっと立っている。カラスどうしはふざけあいつつきあっても、鶺や鷺は仲間と話し合うことも、ふざけあうこともない、だからといって、カラスと話をしたり喧嘩をするような様子もない、ただおおらかな陽の光を受けて、涼しげな風を受けて、遠くを見つめている。

“鶺の目鷹の目”という言葉通り、鶺は目がいいのだろう。その素晴らしい目を使って、水に潜り魚を発見、スルリ近寄りパクリと食らいつくのだろう。羽をすぼめ、水かきのついた足で水中を歩き水を蹴り、すばしこい小魚よりももっと早く獲物に近づく鶺君の姿、丘で休んでいる時、大空を飛んでいる時には見られない、俊敏なハンターの姿が想像できる。「きゃつめは 魚を 根こそぎ 持っていく」と川の漁師を怒らせるように、漁が上手い、せっかくの魚を持っていかれてしまうのだろう。最近気づいたが、田舎の大きな川には何本も、線というのか紐が掛けられている。川に100メートル位おきに紐が掛かっている、あれは鶺よけの紐、あれがあると鶺が来ないと聞いたことがある。水中の姿はこれから以後も肉眼で見ることはないと思うが、空を飛んでいる姿、餌場に向かっているのか、ねぐらに向かっているのか、優雅な姿で高い空に浮かんでまっすぐ飛んでいく。まっすぐ飛ぶという姿は、サギに似ているが、サギはねぐらが川のそばなのか、大きく曲がったり旋回したりするが、鶺は空に舞い上がれば迷うことなくまっすぐ目的地に飛んでいくように思う。とにかく連中の目はいいのだろう、下界の地形を見て頭の中で、あっちこっちとハンドルを切り、ゆっくり羽をはばたかせる。たっぷり食った小魚を消化して、水性の糞を撒いているのかも。

鶺飼の事は、日本書紀・古事記にも出てくるそうだ、千年二千年も昔から日本人は、鶺を飼いならして鮎のような小魚を捕る技術を持っていたようだ。「梁を作って魚を捕る者有り、天皇これを問ふ。対へて曰く、臣はこれを苟苴擔の子と、此れ即ち阿太の養鶺部の始祖なりと」

また中国の随所、日本紹介の中に「以小環挂鷺〇項、冷水捕魚、日得百餘頭」小さな輪を鳥にかけ、日に百匹余りの魚を捕る。

鶺飼は見たことがない、いろんな所の観光事業で鶺飼をやっていることは、TVのニュース画像で見て知っているが、今までその観光に出くわす機会がなかった。昔ながらの鶺匠の衣装、かがり火が水面を鶺を照らすあの光景は何度も見たような気になってしまう。鶺が捕った鮎は、瞬時に絶命するので、味がいいそうだが、漁業としては効率が悪いので、観光事業としてだけ残っているそうだ。鶺飼に使うのは海鶺、大きく従順で使いやすいらしい、川鶺はだめらしい。その海鶺は茨城県日立市産だとか、といろいろ雑学。

今日も安威川に来ている。いつものように水が流れ、草木が風で揺れ、鳥が舞う。ラジオで温泉に入る古老の声を聞いた。「まず湯に入る時は 湯の神様に 感謝の念を込めて・・・」昔話のような古老の声、ほのぼのと温かい。フィクションにしるノンフィクションにしる、快く響く。今のオレも、安威川の流れに水の神様に感謝を捧げる、という気持ちになる。ひとごとのように古老と呼ぶが、オレも間もなく七十歳、古老の部類に入るのかも。神様・仏様には縁のない生涯を送ってきたが、湯の神様、水の神様、というような表現、言い回しは悪くないなと思っている。ほぼ毎日やってくるこの安威川河川敷、いたく気に入っている。どこがいいのかその魅力を語ってみよう。土手の左右の幅は100メートルぐらい、その土手の中の空間が素晴らしい。茨木の街は家々が立ち並び、縦横に通る道には常に車が走っている。小学校に中学校、大型のスーパーマーケット、大型ドラックストア、ファッションショップにリカーショップ、物販・飲食の店、いつの間にか大都会になってしまった。まだ所々に畑や田圃は残っているが、それらもいつ建造物に変わるのか時間の問題だ。ところが土手の下に一步踏み込むと、昔ながらに水が流れ草が生え木が茂っている。土手の法面（のりめん）がコンクリートブロックになったとか、所々に矢板が打ち込まれているとか、鉄骨の立派な橋がいくつかがあった、というような変化はあるが、高度成長した半世紀前に比べ、むしろ水は透明になってきている。四季折々の草が生い茂り、大型の鳥があちこちにいる。大きな鯉、外来種が多くなったらしい亀も常に甲羅干しをしている。今年も蛇を5,6匹は見た、マムシが多かったが、黒い青大将や華麗なシマヘビもいた。ミミズは常に河川敷の舗装道でのたうちまわっている。

今日の空は、うすぼんやりの中に、あそこに太陽がとわかる明るいところがある。この空のうすぼんやり、日本画の連中なら上手く表現できそうな空、紙を水で濡らせておいて、刷毛に水を含ませ、墨を軽く付ける。紙の上をサッと刷く、薄墨色が画面にぼやける、という手順で描ける。その画面の一点を布で吸い取り、紙の白地が現れたら微かに明るい黄か赤を垂らしてやるとおぼろげな太陽が顔を出す。

ここは茨木市と摂津市の境界、中央市場があり、トラックターミナルがあり、両市のごみ焼却場と下水処理場が、民間の産業廃棄物処理工場が点在する。今日はいくつかの処理場水門から勢いよく水が排出されている。排出されてくる水は、少し薬臭い、少し色がついている、というぐらいで、どんどん川の流れに交っている。そんな水の中に大型の鯉が悠々と泳いでいる、大型の鳥が中洲の土の上で、石の上で休んでいる。彼らは仲間なのか友人なのかいつもいる。同じ顔触れのうお釣りのおっさんもいつもいる、こちらは仲間らしい。

あくる日の今日は一日雨だ、強い雨ではないが朝からずっと降っている。傘をさして河川敷の中を歩いている。いっとき「あ やんだかな」と思ったが、ここに出てくるころにはまた降りだした。枯れたススキが風に揺れる。青々としていたススキや葦が冬の今ごろになると枯草色になり、穂先も鋭さがなく綿毛のようになった白い房が風に揺れる。調べると、ススキ・萱（かや）は同じもの。葦・蘆・芦も同じものらしい。ススキも葦も黄色く赤茶け枯れているが、下の方に緑の新芽が出ている。ススキや葦の来年用の新芽なのか、背の高いススキや葦が枯れ、やっと陽の目を見た草がによきによき伸びだしたのか、どっちだろうね。

今日の流れは昨夜から降っているわりには水嵩が増えていない、濁っていない、ずっと弱雨だったせいだろう。5キロぐらい上流から山になる、山に降った雨がここに到達するのは半日ぐらいか、強い雨が降れば、流れが速くなり、水が濁り、みるみる水位が上がる。今日の川はまだまだ澄んでいる、川底の砂が見える、流れの中ほどに中洲ができるぐらいに水嵩は少ない。そんな中洲の所々に大きな木が生えている。どこからか種が飛んできて、何年も経ち大きくなった、年に何度か増水し、木の幹の中頃まで水没するが、根はしっかり地中に食い込んでいるようだ。川の底の砂が見える、自転車や単車が沈んでいる、車のバンパーも見たことがある。歩き始めて10分も経つのに「鳥の姿がないねえ」とすぐに「あ カラス発見」続けて2羽3羽、雨の曇った空を舞っている。コンクリートの上のアオサギ見つめると首をすくめる、隠れたつもりかねえと笑いが出る。その向こうにカモが5,6羽、水の中で追いかけあいをしている、水しぶきをあげ舞っている。バシャバシャ水音が聞こえるぐらいに跳ね返っている。バシャバシャの音でもうひとつ、鯉の交尾、大形の鯉が水の中で暴れている、メスの争奪戦かな。枯れススキの中洲の一角、尖った草が群生している。冬の今、青々と勢いよく伸びている、何の草かねえ。

野口武彦著<今昔物語-地回りの神>先生曰く、日本の神々の複雑多様なヒエラルキー、下っ端の神々の悲哀を読み取りたい。ヒエラルキーとは何ぞや。調べると「本来はローマカトリック教会における天使群の序列 現在では組織の秩序・階層・序列」と出ている。この話を読み、ハツとして、手を打った。神々にも序列がある、下っ端の神さんがいるのか、男根姿の道祖神は下っ端で、菩薩、観音がえらいのか、と笑ってしまった。そういえば、以前、どこかのお堂内で、四天王や十二神将の位を論じている人がいた。下らんことをいうヤツだと思ったが、どうも序列があるらしい。日本古来のやおよろずの方々、石の神さんと木の神さんとどっちがえらい、なんてことはないよね。いずれにしても、神さん同士が、「出世したい」「地位と名誉と金が欲しい」なんて、今昔物語の素晴らしい読み方と感激。

◎巻十三第三十四話<天王寺の僧：道公、法花を誦（じゅ）して道祖を救えること>今は昔、大坂の四天王寺に道公という僧が住んでいた。長年にわたって法華経を読んで仏道を修行し、毎年、熊野に詣でて安居（夏季九十日の精進）を勤めるのを常としていた。熊野から寺へ帰る途中、南部の海岸の大きな木の下で野宿する。夜半、二三十人が木のほとりに集まる、木の下で爺さんと話し始めた。「共に行こう」「いや 馬が足を折り 今夜はいけない 明日にでも」僧は驚き怪しみ、翌朝木のまわりを歩くと、道祖神の絵姿があったが、その板の絵馬の足が折れていた。僧は絵馬の足を繕い、もう一晚木の下で宿った。夜半になると大勢がきて、道祖神も馬にまたがって一緒に出かけて行った。明け方翁が現れ、僧を拝んで言った。「大勢の方々は疫病神でございます お供をしないと 鞭で打たれ 罵られます」「この機会に下劣な（道祖神は男根）神の形を捨て 生まれ変わりたい」「とても私の力には及びません」「いえ 三日間法華経を 読んでくだされば いいのです」四日目に翁が現れ、自分はこれで観音の眷族となり、菩薩の位に昇ります。

◎巻二十七第四十二話<左京の属邦（さかんくにの利延、迷神（まどわしがみ）にあう語>四等官の利延というものがいた。三条天皇の岩清水御幸のお供をしていたところ、九条大路で留まるところ長岡まで行ってしまった。人々が「この辺りには 迷わし神がいるそうだ」言い合って歩いているうちに日が傾いた。今ごろはもう山崎の渡し着いていてもよさそうなのに・・・。利延が前後を見ると、人は一人もいない。これは、狐などのするにや有らむ。

◎先生：日本の神々、神道も仏教も何もかも含めて、絶対者がいない。一時的に場合場合の必要に応じて権限を付託された存在に見えても、ピラミッドの頂点ではない、絶対者ではないのである。日本の宗教空間には、初めから、一神教的超越者がいないのである。「方位方角」「鬼門」「神門」「陰陽道」「霊」「狐」これらの得体のれない対象群が境界不明のまま溶け合って、スペクトル状に連続しているのである。

本居宣長：さて凡（すべ）て迦微（かみ）とは、古の御典（みふみ）どもに見えたる天地（あめつち）の諸々の神たちを始めて、それを祀れる社にいます御霊をも申し、また、人はさらにも云わず、鳥獸木草のたぐい、海山など、そのほか何にまれ尋常（よのつね）ならずすぐれたる徳のありて、可畏（かしこ）き物を迦微とは云うなり。すぐれたるとは、尊ときこと善きこと、功しきことなどの、優れたるのみを云うにあらず、悪しきもの、奇（く）しきものなども、世にすぐれて、可畏きをば、神と云うなり

◎先生：宣長が直観した日本の神々の原型は、決して神々しいものばかりではなかったのである。宣長の言葉によれば「悪しき」存在、「奇しき（神秘的な、霊妙な、不思議なもの他に、奇矯な、の意味もある）」存在も、ひとしく「神」の名で括られるのだ。そもそも「すべての神は善き神のみにあらず、悪しきもありて」とされるぐらいだから、たとえば黄泉から帰ったイザナギが禊で洗い流した穢れから生まれたマガツヒノカミもまた、この世の「悪」の原因をなすところの神格なのである。

こんなに神がたくさんいるのか、神といえども、良からぬ奴、わけのわからぬ奴、いるんだねえ、日本には。

「池を見よう」「池が見たい」ということでやってきた。車が湖西道路に入ると霧が出ている、比叡も比良も琵琶湖も見えない、霧は久しぶりだ。遠敷峠が登れるかと、梅ノ木から左折した。この辺りの過疎の村々は穏やかな里山地帯、好きな景色のところだ。残念ながら、除雪は最後の村までで、それより先の遠敷峠までは雪で通行不能、「麻生への道は」と向かったら、除雪がされ、ノーマルタイヤでじゅうぶんに走れた。

今、登り始めて15分ぐらい、気持ちがいい。山、二カ月ぶりの山、ここは高島トレイル、木地山のすこし手前の尾根道から登りはじめた。たかだか500,600メートルの山だけれど、最初の登りが急だ。昨日は雨が降ったのか、濡れた落ち葉を踏みしめる。左側は杉の植林、鹿よけのテープがすべての杉に巻いてある、右側は自然林、細い雑木というには木に失礼なことだが、名前の知らない幾種類かの木々が葉を落として立っている。十月の経ヶ岳から帰り「いてて」の日々、痛めた膝がようやく楽になってきたかと安堵していたら反対側の膝に来た、以来「いてて」と戦ってきたとはいささか大げさかも知れないが、これから寒さに向かうこの季節、「しばらく山どころではない」とあきらめていた。おまじないやら鍼灸には頼らなかつたが、ネットに書いてあることはいろいろ試みた。ヒザ裏カイロ・かかとの上カイロ・青竹ふみ・就寝時の電気毛布、どれが効いてきたのか、ひにち薬か、ずいぶんと楽になった。ここは5時間ぐらいの行程の山、カイロを4枚、ひざ内側のピリリポイントの貼り薬、膝にサポーター、温かくするため雨具ズボンの上にスパッツ、これで5時間耐えられるか、一応痛み止めの薬は持参しているが使いたくない。

安威川、昨日は雨だったので、傘をさしての早足歩きでそそくさと切り上げ帰ったが、一昨日の安威川は晴れていた、いつものようにベンチでストレッチ、上を向いて足上げの時、空を見た。「えええ 雲がない、まったくない、青いだけの空だ」と驚いた。今日も上まで来て尾根道を歩きながら空を見上げると、雲がない、来るときは霧がかかっていたが、今は晴れ、雲がなく、向こうの山に雲海がかかっているだけ。服装チェックを怠った、笑ってしまう、下着の長そでシャツ一枚で歩いている、「ま いいか」である。暖かい、雪が所々に残っているが、この季節、シャツ一枚で歩けるとは。いつもならシャツの重ね着の上にセーター、防寒ヤッケで「寒い」と叫ぶ季節じゃないのかな。ヒザは何ともない、登りの2時間は苦も無くどンドン歩けた。おだやかな道の方が歩きづらい、先ほども小枝を蹴りヒザをひねると「いてて」痛みが走る、石ころ、枝、根っこは要注意だ。途中なんか所かに、糞、「なにこれ まさか 熊」と恐れたが数が多いので「これは 猪」で落ち着いた。最初見たやつは、牛の形状、手のひらサイズだったが、次は太めの筒状がプツリプツリ、黒い土色、ネットで見るとまさに猪だった。

「おおお 元気でしたか」お気に入りのブナがある、元気の盛り、まわりのブナより一回りも二回りも大きい、しかも汚れていない、どこにも水が浸み込んで黒ずんだ所がない、上下前後左右に太い枝を伸ばしている。もうすぐ正月という今の季節、ここ尾根道にはブナもクリもナラもある、名も知らない大木もある。全部の木が葉を落とし、細い枝が天を指している。そんな大木の枝々の所々、こんもり微かに緑が感じられる球がある。「あれは…」「ヤドリギ」なるほど寄生植物がふんわり浮かんでいる。あんな高いところでどうして着生したのかね、鳥の糞が上手く枝の上に乗ったのか、ふわり綿帽子の種が上手く枝の上に乗ったのか、大木に葉のない今の季節はクリスマスの飾りもののように見え、青い空にホンワリ浮いている。

下りはまっすぐ歩けない、体を横に向けて歩いた、いつものスピードが出ない、急なところは踏ん張りがきかない、慎重にゆっくり降りた、30分、もう30分、川の音が聞こえ、道路が見えてきた「帰れた 足は大丈夫」うれしい限りだ。車につき、ワンポイント貼り薬を新しいものに変え、上のシャツを乾いたものに変え、旨いものを食い、水をしこたま飲んで帰路についた。山の帰り、山ではよほど汗をかくのか、常にペットボトルを横に置いてぐいぐい飲んでいる。今日も上では500CCの水だけですませたが、降りてからはその倍ぐらいの水を飲んだ、水が旨い。1年前の冬もここにきているが、その時は積雪で池まで到着しなかつた、まもなくどンドン雪が降りだすのだろう。

今まさにクリスマス、年の瀬という時期だけど、とんと関わりがなくなってきた。今もラジオでクリスマス曲が流れ、DJのおじさん、クリスマスの話に終始している。クリスマスが終わると「今年 一年を 振り返る」「2016年の重大ニュース」というかまびすさが始まり、それが過ぎると、ゆく年くる年から、正月のばかばかしいお笑いが続く。このような半月ぐらいの空白、虚しさをずっと見てきた、自身も参加してきたが、楽しめなかった。50歳代前後は「山に行ってきます」と年末からの4,5日間、信州の雪の中で過ごしていた。

「絵 というのはねえ やったあ できた うまくいった」「美の女神が 微笑みかけてくれる」なんて叫べる日、心地よい話、歓喜が毎日あるわけがない。「アカン」「だめだ」「くそっ」という日が続く。筆をとって画面をさわっても、重さが続く、解決しない、明日も明後日も、一週間後も半月後も続く。「今日も 美の女神の微笑みがなかった くそっ」という一日が終わる。絵を眺めながら、次の手が見つからず、椅子に座ったまま居眠りもある。何もしない日々が続いても腹だけは減る、仕方なくではないが、旨く飯を食う、夜はそのまま寝る。そんな日々が続いた何日目かに、「ええい どうにでもなれえ やけくそだあ」思い切って筆をとり画面に色を入れると、輝きが出てくる。「やった」「これでいい」「美の女神が微笑みかけてくれているのでは」「よかった すばらしい」とそれこそ嬉しい時だが、これが日々続くわけではない。世に天才といわれたピカソや北斎なら、嬉しい日々が二日に一回、三日に一回という回数でやってくるのではとうらやましい限り、これは才能というかセンスの違いだね。

お定まりの絵の停滞が続いていた昨日、半月ほど前からストップしている絵に、「コラージュ してみよう」と思い立った。白いキャンバスに絵の具を塗り、はさみで切って画面上に並べてみた。この技法は、今年の前半、水彩画の整理に明け暮れたが、その時「はしにも ぼうにも かからん」と見てすぐにあきらめかけた絵を、切ったり貼ったりと、コラージュを試み、何枚かのいい絵を作った。汚れてしまった絵、描きこみすぎた絵、なっとくがいかない絵、これらをナイフで切ったり、色紙を貼ったりという技法でよみがえらせた。今回もこの技法のつもりだったが、白のまま載せればいいものを、すこし色を入れたり塗ったりした。布を絵の画面に並べると、「いいような悪いような」とピンとこない、ならばと、画面の上に置いた布をセロテープを貼り落ちないようにして、絵を立てかけじっくり見たが、ちっともよくない、これはよくない。そんなこんなで右や左や、また色を入れたり塗り直したりと右往左往したがちっともよくなりません。残念ながらこの絵は横に置いた。絵を描く時、次の一手を入れると、良くなりかけた絵がだめになってしまう、汚くなってしまふ、せっかく良くなりかけた芽を摘んでしまふ。この恐れが次の一手を躊躇している、動きが止まってしまふ。まるで武道の動きのようだが、まるで包丁さばきのようだが、オレの絵はこれと似たような動きがあるのかもしれない。「捨て身だとか 少々汚くても 外連味の無い切り口」だとかこういう言葉を言ってみたかった。これで火が付き、同じように半月ぐらいストップしたままの絵をひっぱり出して、太い筆で思い切った色を入れてみた。来ましたよ、女神が。「こんな簡単なことか」「がはは」である。

今、安威川に来ている。対岸の産業廃棄物処理場、おそらく材木を燃やしているのだと思うが、大きな煙突からモクモク出ている、白い水蒸気の煙だろう。風が弱いのか、たなびくこともなくまっすぐ上に広がっていく、少し上にいくと渦を巻くように乱れ、もう少し上にいくと空気に溶け込むように消えていく。今日の空は曇っている、ちょうど煙が上がっていくあたりは雲の底、濃いグレーの空に向かって白いモコモコが上がっていく。「これは なかなか 幻想的な景色」と見ていたが、オレがどんどん前の方に進んでいくにつれ、濃いグレーの空から明るい眩しい空に変わっていった。空が、白くなりだすと、なんと今度はモコモコ煙に色が付きだした、煙の底の一部が濃いグレー色になりだした。さっきまで真っ白の煙が、白とグレーのツートンカラーになったのではないか、不思議だねえ、と感心している場合かね、これが絵を描いている人間の言うことかね、デッサンの法則から、それは至極もつともなことではないのかね、と天の声が聞こえてきそう。今日のお日様は、おぼろ太陽、ぼんやり雲の間に浮かんでいる。オレがゆっくり走るにつれ、前に進むにつれ、煙突が白いモコモコ下がっていく、オレの立ち位置が危ういねえ、がんばろう。

いつもの安威川で空を見上げた。今日の空はきれいだ、白い雲が綿帽子のようにいくつも重なる、小さく白い塊の並び、その重なりの方角に青い空が見える。青さはまさに空色、絵の具を出してヒトに空の色はと問えば「空の色はこれ」とほとんどのヒトがいうきれいな青色と雲の白のバランスがいい。先日見たのは対岸の煙突から昇る白い煙、煙と見たのは水蒸気と思われるので上の方で消滅していた。先日の黒い空に向かって昇る白い水蒸気の煙、今日の青い空に隙間なく並ぶ白く丸い雲、「ほんとにきれいだね」と思う。自然はいい、天文学的な数字の時間、いつも同じように何かの姿を作り出している、雲であれ水であれ、木々であれ動物であれ、ゆったりした時間の中で、ゆったりと変化してゆく。いってみれば我々は、ヒトは、ほんのひと時の隙間を見せてもらっている、はじっこのどこかに参加させてもらっている、自然もヒトも、ただ在るだけ、時間があるだけ、空間があるだけ。

白い煙、白い雲、と感慨にふけりながら、若いころ考えていたこと、デッサンのことを思い出した。「デッサンとは」なんて難しいことはもうどうでもいい、若いころに毎日木炭を握って紙に描いていた、「ああでもない こおでもない」と理屈をこねながら、描いていた。もうほとんど石膏像の名前も忘れてしまったが、ローマやギリシャ時代の英雄の石の像、大理石の像、それらを白い石膏でコピーしたものを描くのだ。「この像は 型が いいので 一級品です」なんて話、「消しゴム代わりの パンが旨い」というお定まりの話から、「木炭は硬いのがいい いや 柔らかいのがいい」「木炭氏は ここのがいい いや あそこのがいい」生意気にもそんな話に始終していた。裸婦デッサンもたくさん描いた。

そんな時代が終わって絵を描き始めて、「デッサンとは ものの存在とは ひかりとは」なんてまたまた生意気な話に遭遇した。デッサンはものの存在を描き表す。白い卵を置き、光がこちらから差すと、あちら側に影ができる。影には、陰影という言葉があるように、影は床面にでき、陰陽は卵自体の白さのなかに現れる。この理屈はわかっていたが、「じゅあ 光がなきゃ 卵は見えないのか」「光がなきゃ 卵は存在しないのか」「卵は存在している 光がなくても在る」「光がなくても 存在する卵なら 描かなくては ということに なるんじゃないのかね」「なら光を無視して 存在だけを描く デッサンの法則なんてほっとけ 無視だ」というようなことを考え、吠えていた時期があった、と懐かしく思い出した。コンクール用の石膏デッサンならいざ知らず、オレには、中世の絵、光と影の絵はいらない、具象絵画といえども、その存在自体を描く、それが大事なのは、なんて叫んでいた。デッサンを教えてくれる先輩たちは、光がこっちからあると、影がここに出て、陰陽がここに出る。そんな空間を木炭の墨色で、存在感、動き、空間、距離感を出さなければ。もちろん像を忠実に描くのが一番大事だけれどね。今から考えると、オレ自身が描きたかった絵が、具象からその具象がどんどん抽象化していった。光や影よりも、ものの存在よりも、画面の色の面積の配分、が気になりだした。具象のシッポを引きずりながら、色面が大事になりだした。

写真家の中西プロと知りあった 20 年ぐらい前の彼が「朝の光」「夕方の一瞬の光」「夜の微かな光」とその言葉に、カメラマンにとっては光がそんなに重要な要素なのかと驚いた。知り合った当初はただ驚いていたが、長年付き合いあって写真を見せてもらうと、光とはこういうことかと感心させられる。草木にしても、構造物にしても、動物昆虫にしても、光の当たり方、当て方で様々な表情が出てくる。「え これがあ草か」「これがあ街の 表情か」と酔いしれる。中世のヨーロッパの油絵の光、現代の夜空の光、宇宙の光の一閃、光もなかなか素晴らしいじゃないか。

展覧会の切符をいただいた、メモに「鈴木其一は 次にブレイクする画家ですよ」と書いてある。知らなかったので検索してみた。鈴木其一は江戸後期の琳派の画家。琳派は桃山時代、本阿弥光悦と俵屋宗達が創始し、尾形光琳・乾山（けんざん）兄弟によって発展、酒井抱一、鈴木其一と続いている。懐かしい名前がずらずら出てきた、好きな作家達だ。この琳派は、他の流派のような世襲制とか、師匠弟子といった家元制ではなく、現代画家のように、「あのタイプの絵が好きだ」「桃山時代の 宋達が好きだ 光琳が好きだ」というようなヒトの流れの派らしい。其一の絵も、いわれれば琳派、装飾的で、デザイン的で、華麗、オレの好きな絵だ。琳派の絵、木々の緑、水の流れを見ていると、浮世絵の、北斎や広重の線が目につかぶ、参考にしたのだろうね。琳派、いいねえ。